Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 第18回近代オリンピック競技大会のレガシーについて |
| Author(s) | 輿石, まおり |
| Citation | デザイン理論. 2009, 54, p. 17-31 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/53386 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# 第18回近代オリンピック競技大会のレガシーについて

輿　石　まおり

キーワード：
レガシー，2016年大会，1964年東京大会，
1972年札幌大会，1998年長野大会
Legacy, Games of the XXXI Olympiad 2016
Games of the XVIII Olympiad, XI Olympic Winter Games,
XVIII Olympic Winter Games

はじめに
Ⅰ．背　　景
　A．戦後20世紀の近代オリンピック競技大会
　B．レガシーの明文化
Ⅱ．1964年東京大会，1972年札幌大会，1998年長野大会
　A．1964年東京大会と1972年札幌大会
　　1．エンブレム
　　a．赤 い 円　　b．日本の家紋
　B．1998年長野大会
　　1．エンブレム
　　a．Snow flower　　b．Colorful
おわりに

## はじめに

2002年，『オリンピック憲章 *OLYMPIC CHARTER*』にオリンピックの遺産（legacy）（以下では，レガシー，とする）の概念が新たに明文化され，21世紀に近代オリンピック競技大会を開催する都市の第１の課題はレガシーの認識と施行となった[1]。

これまで近代オリンピック競技大会開催を目指す候補都市が開催都市に選出されるためにはIOC 側が提示する条件項目に焦点をあて，例えば十分な運営資金の確保，最新設備及び最先端技術の導入，改善策の提示により，各項目の実現の可能性を高め，内容の充実を図ることが肝要であった。レガシーの明文化は，こうした候補都市ひいては開催都市の受動的であった役割と立場に変化を与える。

レガシーの明文化により開催都市には，自らの何において近代オリンピック競技大会及びオリンピズム[2]の普及と発展に貢献するのかを明示することが，開催都市にはその実践躬行が必要不可欠となる。

第31回オリンピック競技大会（以下では，2016年大会，とする）招致の候補都市は

Chicago，Madrid，Rio de Janeiro，東京都である[3]。

２度目の近代オリンピック競技大会招致を目指す[4]東京都，特定非営利活動法人東京オリンピック・パラリンピック招致委員会（TOKYO 2016 Bid Committee. 以下では，東京2016，とする）は，第18回近代オリンピック競技大会（以下では，1964年東京大会，とする）のレガシーを引き継ぎ，新たな21世紀型の近代オリンピック競技大会像を提示することを掲げる[5]。

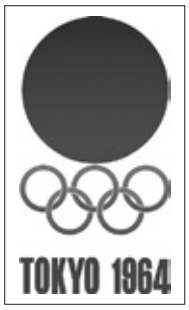

図1

しかしながら，現在までのところ，東京2016はこれを提示し得ていない。例えば，東京2016はレガシーとして1964年東京大会時に使用された施設の再利用を提示している[6]が，これは21世紀の近代オリンピック競技大会の課題の一つ，環境配慮型である一例としてIOCが示した既存施設の再利用[7]に相当し，他の候補都市にも可能な内容でしかない。

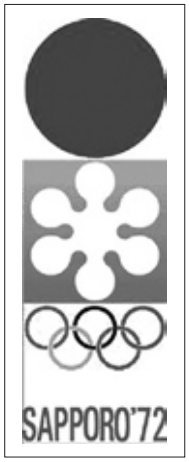

図2

レガシーの明文化以前の候補都市であるかのように東京2016は，IOC側の提示する条件項目の基準を満たし充実をさせることに焦点をあて，近代オリンピック競技大会開催が開催地域，日本及び開催都市，東京都にもたらす恩恵について明示する[8]に留まっている。

この問題の要因は２点挙げられる。第１はレガシーが正しく認識されていないこと，第２は現在から未来にかけて近代オリンピック競技大会とオリンピズムの発展に貢献するという観点から1964年東京大会の特徴が捉えられていないことだ。

図3

そこで本稿では，先ず戦後20世紀に開催された近代オリンピック競技大会とレガシーの明文化に至る経緯について概説し，次に日本で過去に開催された３大会，1964年東京大会，第11回冬季オリンピック競技大会（以下では，1972年札幌大会，とする），第18回冬季オリンピック競技大会（以下では，1998年長野大会，とする）と各大会の象徴であるエンブレム図１，２，３の検証，考察から，現在から未来にかけて近代オリンピック競技大会とオリンピズムの発展に貢献するという観点から1964年東京大会の特徴を捉え，最後に1964年東京大会から継承すべきレガシーを明らかにしたい。

## Ⅰ．背　　景

### A．戦後20世紀の近代オリンピック競技大会

近代オリンピック競技大会開催における采配は開催都市に一任される[9]ことから各大会は開

催都市の個性，特色，抱える問題，時代等の背景と相まって独特の様相を見せるものとなる。

戦後20世紀に開催された近代オリンピック競技大会を扱うIOC公認の公式報告書[10]からは次の２つの特徴が指摘できる。第１は近代オリンピック競技大会開催におけるオリンピズムの普及という第一義の目的の達成如何に関しては自明のものとして不問に付されていること，第２は地球規模で展開される近代オリンピック競技大会が国体と結びついたglobalismの具現の場として捉えられていることだ。

戦後20世紀に開催された近代オリンピック競技大会の公式報告書では大会の成功が主に数値化，統計化可能な情報，例えば大会開催期間中の観客動員数，関連するＴＶ番組の視聴率，近代オリンピック競技大会開催を契機とした国際基準に適う都市の近代化（電気，ガス，上水，下水，交通網等の整備），スポーツ人口の増加，経済的発展が開催都市及び開催地域に確認されること，において量られ報告されている。

近代オリンピック競技大会はオリンピズムの普及を第一義とすることからIOCは，その開催計画において①開催都市数の増加，②参加地域の拡大[11]，③大会開催の経験を積む，オリンピズムを体現するロールモデルとなる都市数の増加と地域の拡大[12]，を留意してきた。しかしながら，オリンピズムと国体と結びついたglobalismが混同され商業主義，勝利至上主義等が台頭した戦後20世紀の近代オリンピック競技大会（以下では，20世紀型大会，とする）は，国体と結びついたglobalismの地球規模での普及に貢献する一方，オリンピズムの地球規模での普及という本来の目的において機能不全に陥る。

公式報告書からも看取できるように，20世紀型大会は⑴オリンピズムに換わってglobalismが参加メンバーを繋ぎ纏め，⑵globalismへの参入と国体とを結びつけるものである。先行研究[13]において20世紀型大会でのオリンピズムと国体と結びついたglobalismとの混同という問題，その継続がオリンピズムの普及を阻害するものとなることを指摘し論じたものはない。

IOCは，こうしたオリンピズムが形骸化した近代オリンピック競技大会を21世紀においても継続してゆくためにレガシーを明文化したのではない。レガシーには国体と結びついたglobalismは含まれていない。

### Ｂ．レガシーの明文化

第二次世界大戦の記憶は人々に，貧困と不平等が戦争の原因であり結果である，という共通認識をもたらす。大量生産・大量消費，拡大拡張路線を旨とし，均一・均質な世界を理想に掲げるglobalismは，貧困と不平等を解決し解消する，平和を獲得する方法として認識され浸透してゆく。更に，平和を自他共に認識する手段として，スポーツ，文化，教育といった平和な社会にこそ可能な選択を推奨するオリンピズムを掲げる，近代オリンピック競技大会への参加

を各国が目指す。こうした20世紀型大会のロールモデルとなったのが1964年東京大会である[14]。

20世紀型大会の特徴，オリンピズムと国体と結びついたglobalismとの混同は，戦後という時代における平和に対する解釈の錯綜が第一の原因である，と本稿は指摘する。

20世紀型大会において，具体的且つ平易な国体と結びついたglobalismと混同されたオリンピズムは，その解釈については兎も角，近代オリンピック競技大会という存在の地球規模での周知を達成する。しかしながら，本質的に異なる両者の混同は解消されなければならない。

IOCは20世紀型大会を否定することなく，21世紀の近代オリンピック競技大会が国体と結びついたglobalismから決別する方策として，過去・現在・未来にわたり総ての近代オリンピック競技大会の共通項であり中核がオリンピズムであることを明示するためにレガシーを明文化したのである。2002年のレガシーの明文化の目的はⓐオリンピズムを実践哲学として位置づけ，ⓑオリンピズムに関するフィードバック機構を構築することで，ⓒ一種の不文律にあるオリンピズムに対する拡大解釈を押さえることにある，と本稿は指摘する。

レガシーの明文化により，21世紀の近代オリンピック競技大会では国体と結びついたglobalismには因らない開催都市独自の，近代オリンピック競技大会及びオリンピズムの普及と発展に貢献するオリンピズムの実践躬行が課題となる[15]。

既に指摘したように，20世紀型大会のロールモデルが1964年東京大会であり，その国体と結びついたglobalismがもたらした成果は記録され，成功談として記憶されている[16]。更に言えば，国体と結びついたglobalismは1964年東京大会のみならず近代オリンピック競技大会のレガシーだと錯覚されている[17]。東京2016が，1964年東京大会から継承すべきレガシーと国体と結びついたglobalismとを峻別し得たならば，それは21世紀の近代オリンピック競技大会の発展に貢献する，新たな21世紀型の近代オリンピック競技大会像の提示[18]ともなる，と本稿は指摘する。

以上を念頭に，1964年東京大会の特徴と1972年札幌大会，1998年長野大会に継承されたものを見ていこう。

## Ⅱ．1964年東京大会，1972年札幌大会，1998年長野大会

### A．1964年東京大会から1972年札幌大会へ

1964年東京大会と1972年札幌大会の２大会の結びつきには特別なものがある。両大会共にアジア初の近代オリンピック競技大会（夏季・冬季）開催である。更に両大会は開催が確定していながら戦争により返上し，戦後再び大会開催に至るという経緯を共有している。

近代オリンピック競技大会開催は日本の戦後復興の象徴とされ，夏季の1964年東京大会に引き続き，冬季大会を札幌で開催することで復興は完成と見なされていた[19]。1972年札幌大会

エンブレム図２をデザインした永井一正（1929-）が述べたように

「…東京も札幌も，オリンピックは都市開催ですが，その実は壮大なる国家イベントだったのです。…[20]」

第二次世界大戦後，近代オリンピック競技大会は国家イベント化を進めるが，その端緒が戦後日本で国家イベントとして開催された1964年東京大会と「…1964年東京大会の残像が世界中に残っている中での開催…[21]」であった1972年札幌大会である。両大会以降，夏季・冬季共に近代オリンピック競技大会の開催は国体優先の，事実上，国家の枠組みにおいて捉えるものとなり開催都市名は仮称化する。

次に1964年東京大会と1972年札幌大会を象徴する両大会のエンブレムから，1964年東京大会から1972年札幌大会に継承されたものについて見ていこう。

### １．エンブレム

1964年東京大会での斬新で実験的なデザイン計画（例：ピクトグラム）は，以降の国際的イベントの規範となると共に，大会を運営した日本を世界に印象付けるものとなった[22]。1972年札幌大会はその1964年東京大会と一対に捉えられた大会である。

1972年札幌大会のデザイン計画は1964年東京大会に引き続き勝見勝（1909-83）が統括する[23]。

「札幌オリンピック冬季大会の主催が日本の手に委ねられるにいたったのは，東京オリンピックの成果に対する国際的評価によるところが大きい。したがって，札幌オリンピック冬季大会のデザインポリシーも，東京オリンピックのそれを参考にして，札幌という地域社会にふさわしいものにしたいと考えた。…[24]」

勝見勝が1964年東京大会の有様を近代オリンピック競技大会の特殊な一過性のものと認識していたことは，勝見勝の万国博覧会及び近代オリンピック競技大会に対する理解に明らかだ。

「…万国博覧会が一種のデザインの祭典であるのに対し，オリンピックの主役は，あくまでスポーツであり，スポーツマンであって，建築家やデザイナーは，裏方として，後景に退くべきものである。札幌のデザインポリシーが，地味で，平凡で，前衛主義の実験を避け，手慣れたデザイン技術を駆使して，節度のある効果をあげることを目指しているのは，そういう私の信念に基づいている[25]。」

勝見勝のデザイン計画は1964年東京大会でのデザイン計画を基調とすることで1964年東京大会の印象を補強する一方，1972年札幌大会の独立性，独自性を削減し両大会を一対に捉えさせるためのものであった，と本稿は指摘する。

1964年東京大会と同様に指名コンペが行われ1966年10月，1972年札幌大会エンブレムは，

1964年東京大会のデザイン計画にも参加した永井一正による作品に決定された[26]。1972年札幌大会エンブレムと1964年東京大会エンブレムとの関連性については永井一正も認めている[27]。

1972年札幌大会エンブレムの独自性は永井一正が述べるように「マークといえば固定したものという既成概念を打ち破り[28]」，可変的でありながらイメージの一貫性も保つことだ。1972年札幌大会エンブレムは独立した３つの正方形から成り，各ブロックには赤い円，雪の結晶，オリンピックシンボルとSAPPORO '72が配される。これらブロックの展開には縦一列，横一列，空白の一ブロックを加え一回り大きな正方形を形成する，の３通りがある[29]図４。1964年東京大会エンブレムに対して一部から「一本調子[30]」が指摘されたが，1972年札幌大会エンブレムは，こうした可変性により応用の幅を広げるものとなる[31]。

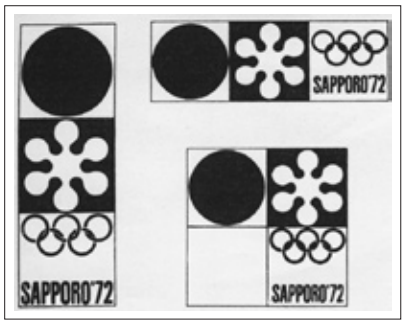

図４

近代オリンピック競技大会を示すオリンピックシンボル以外に，1972年札幌大会エンブレムと1964年東京大会エンブレムを関連づける要素は①赤い円，②日本の家紋に因ること[32]，③1964年東京大会エンブレムの金色と対になる銀色の使用，④サンセリフのロゴタイプの使用，⑤構図，である。これらの中から両大会の共通項であり開催地域の日本を特定する①と②を取り上げ，先ず赤い円について見ていこう。

ａ．赤 い 円

1964年東京大会エンブレムをデザインした亀倉雄策（1915-97）は赤い円に太陽と日本の国旗の両方を重ね合わせたこと，日本の家紋からの影響を述べている[33]。1972年札幌大会エンブレムは，その赤い円を継承する。

両大会エンブレムの赤い円の第一の特徴は日本の国旗を想起させることだ。そこで赤い円と日本の国旗との関係を見ておこう。

亀倉雄策については不明であるが，永井一正が日本の国旗デザインを熟知していることは明らかだ。日本の国旗のデザインについて1964年東京大会を契機に新しい提案がなされたが，永井一正はそれに参加している。

この新しい提案とは，明治３年の太政官布告以来，

図５

国旗の縦の５分の３であった円の直径を３分の２へと微調整を施すというものである図５。この３分の２とする案は1964年東京大会では一部，1972年札幌大会及び1998年長野大会では全てに採用された[34]。

亀倉雄策がデザインした1964年東京大会エンブレムの赤い円，永井一正がデザインした1972年札幌大会エンブレムの赤い円のいずれも日本の国旗の何れの図と地の配分にも準じたものではない。しかしこれら赤い円は，日本の国旗のデザインとは一致しないにもかかわらず日本の国旗を想起させるのだ。ここから本稿は，白地に１つの赤い円という組み合わせはデザイン如何にかかわらず日本の国旗を想起させる，と指摘する。

国旗は特定の政治的共同体の象徴である。

両大会エンブレムと同様に国旗を用いた近代オリンピック競技大会エンブレムとしては，1932年 Los Angeles 大会の大会エンブレム[35]がある図６。しかし1932年 Los Angeles 大会エンブレムとは異なり，両大会エンブレムは国旗を単にレイアウトしたものではない。両大会エンブレムの赤い円が，日本の家紋に因るデザインであることに本稿は注目する。

図６

以上を踏まえ，次に，日本の家紋との関連性を見ていこう。

ｂ．日本の家紋

オリンピックシンボルを除くならば1964年東京大会エンブレムと1972年札幌大会エンブレムに共通する画像は赤い円である。赤い円は色彩を度外視すれば日本の家紋，例えば黒餅紋図７と符合する。

1972年札幌大会エンブレムは赤い円の他にもう１つ画像を持つ。その雪の結晶を模した画像は日本の家紋，雪紋の中でも初雪図８を基本としたものだ[36]。1964年東京大会エンブレムと1972年札幌大会エンブレムは日本の家紋を共通項とするのだ。

大会エンブレムに日本の家紋に因る画像を用いる第一の効果は，日本を文化的共同体の側面から特定することだ。例えば日本の家紋に因る画像に共通する曲線使いを永井一正は「日本らしさを表す[37]」ものと紹介している。

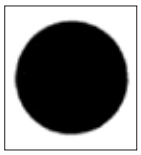
図７

本稿が特に注目するのは，日本の家紋の日本固有の文化（例：血統，家系，帰属勢力）を示唆する役割だ。これはオリンピックシンボルが既存の枠組み（例：国家，文化）を横断する枠組みを示唆し「…オリンピック・ムーブメントの活動を表すとともに５つの大陸の団結，さらにオリンピック競技大会に世界中から選手が集うことを表現…[38]」することとは異なる。

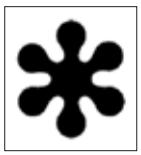
図８

赤い円，雪の結晶とオリンピックシンボルは幾何学形体を共通項に調和して

いる。しかし，赤い円及び雪の結晶は正方形に内接する真円の範疇に収まる日本の家紋に因る[39]が，オリンピックシンボルの５つの真円の組み合わせはそうではない。こうしたデザインの方法の違いは２者が異なる意味を担うことを示す。

汎世界的である幾何学形体から成るという両者の目に見える共通性は，日本が①国際的であるオリンピック・ムーブメント（含近代オリンピック競技会）に属するメンバーであることを日本国内外に示唆するものだ。一方，目には見えないデザインの方法の相違は，日本が②固有の文化を持つ唯一無二の存在であることを，特に日本文化に慣れ親しんできた人々に訴える[40]ものとなる。

既に見たように，白地に１つの赤い円はデザインの如何に関わらず日本の国旗を想起させる。しかし第二次世界大戦への参戦と敗戦降伏という結果により負のイメージを背負った日本の国旗との関連性だけで1964年東京大会エンブレム及び1972年札幌大会エンブレムが，②のような日本に対する肯定的な認識を人々にもたらすことは難しい。

1964年東京大会エンブレム及び1972年札幌大会エンブレムにおける②の効果は，日本という特定の歴史風土に培われた，日本に暮らす人々の日常に溶けこみ，日本の国旗以上に慣れ親しまれてきた日本の家紋の，そのデザインの方法がもたらしたものだ，と本稿は指摘する。

更に言えば，汎世界的な幾何学形体を共通項にした両者のデザインの方法の違いは，オリンピズムと国体と結びついた globalism との混同を示唆するものだ，と本稿は指摘する。

次に1964年東京大会から34年後，1972年札幌大会から約四半世紀後（26年後）に，20世紀最後の冬季大会として開催された1988年長野大会について見ていこう。

### B．1998年長野大会

1964年東京大会と1998年長野大会は夏季と冬季の違いはあるが，双方とも第18回目の開催である。開催都市の長野市は1940年，第５回冬季オリンピック競技大会の国内候補地の選考において札幌市に敗退した経緯を持つ[41]。

IOC 側にとって20世紀型大会の功績は，第二次世界大戦後の約半世紀の間に地球規模において，近代オリンピック競技大会（夏季，冬季）を周知し得たことである。そのためアジア地域では４度目の開催（日本では３度目の，２度目の冬季大会）となる1998年長野大会において，20世紀型大会を是が非にでも更新継続しなければならない理由は IOC 側にはなかった，と本稿は指摘する。

1998年長野大会の目的は

「…１世紀以上続いてきたオリンピック・ムーブメントを統括すると同時に，オリンピックのあるべき未来像を提唱する大きな資格を負っている…（中略）…エポックメー

キングの役割を果たす21世紀の架け橋として，…[42]」

なることであった。1998年長野大会は20世紀型大会を基本に，しかしその問題点を補うことに焦点を合わせた脱20世紀型大会であったのだ。

1998年長野大会の特徴は大きくは４点，①子ども達の参加，地域住民による積極的なボランティア活動，②大会の簡素化，③自然との調和（環境保護），④インターネットの整備と導入，である[43]。国民一般に近代オリンピック競技大会（夏季，冬季）を周知させ，大会開催への理解と支持を得ることから取りかかった1964年東京大会及び1972年札幌大会では①の段階にまでは至らず，②とは逆を行く開発最優先の状況下において③は考慮されたとはいえない。1964年東京大会と1972年札幌大会でのＴＶ，ラジオ，印刷媒体と比べて情報伝達における時間と空間の制約を大幅に減じる④は次世代型メディアである。

以上を踏まえ，次に，大会エンブレムを通して20世紀型大会である1964年東京大会と1972年札幌大会から，脱20世紀型大会である1998年長野大会へ継承されたものについて見ていこう。

### １．エンブレム

1964年東京大会と1972年札幌大会の運営においても IBM をはじめ外資企業の参入はもちろんあったが，デザイン計画は勝見勝が統括し，デザインは日本国内で活躍する日本人デザイナーが制作し，広告関連は電通が主導した。一方，1998年長野大会では勝見勝に相当するデザイン計画の統括者はなく，各種デザインは日本人デザイナーが制作するものの外資系広告会社 Landor Associates[44] が大きく関与する[45]。

1998年長野大会エンブレム図３の作者は当時 Landor Associates に所属していた篠塚正典（1960–）[46] である。亀倉雄策，永井一正とは異なり，篠塚正典の名前は IOC のＨＰ等の公式の場では公表されていない。

#### ａ．Snow flower

1998年長野大会エンブレム（以下では，Snow flower，とする）には公式の別称が付けられた[47]。Snow flower は①選手のダイナミックなフォルム，②六角形の雪の結晶，③高山植物の花，という３種類のデザインモチーフを複合的に示したものだ[48]。しかし，デザインモチーフが日本の国旗，雪の結晶であることが一目瞭然である1964年東京大会と1972年札幌大会の大会エンブレムとは異なり，Snow flower ではⓐ観者が３種類のデザインモチーフを認識し含意を理解するためには別途，説明が必要であり，ⓑ Snow flower という公式の別称は開催地域，開催都市の何れも暗示しない。

1964年東京大会と1972年札幌大会の大会エンブレムでは日本の国旗を想起させる赤い円が，

更に日本の家紋に因ることで日本を政治的及び文化的側面から特定した。しかしSnow flowerには(1)赤い円は用いられず，その不定形且つフリーハンド様の画像は(2)幾何学形体を基本とした日本の家紋，例えば高山植物であり長野県の県花である竜胆を題材とした竜胆紋（例：竜胆車図９），また長野県が雪国であることを示唆する雪紋（例：矢雪図10）とも異なる。

図９

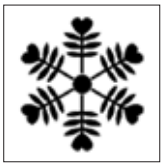

図10

このように開催地域と開催都市を政治的にも文化的にも特定せず，開催地域の人々に特別に訴える工夫が施されず，制作者名が公知されていないSnow flowerの特徴は，その匿名性にある。

１文章中に固有名詞が２つ以上ある場合，それらの重要度の高低差等は文脈が決める。固有名詞と普通名詞では日本語の場合は文法上の差異はない。しかし近代オリンピック競技大会の公用語（例：英語）では固有名詞の重要性が優り，文脈は第一義となる固有名詞と対応する。こうした言語の関係はそれと対となる画像に反映され[49]，観者の読み取りに影響を及ぼす。

1964年東京大会と1972年札幌大会の大会エンブレムには固有名詞と対になる画像（赤い円，オリンピックシンボル）が併存するが，国体を主張する20世紀型大会は開催地域を示す赤い円を前面に押し出す。一方，1998年長野大会の大会エンブレムではSnow flowerが普通名詞であることからオリンピックシンボルが第一義となるが，文脈にあたる脱20世紀型大会は20世紀型大会の補完を特徴とし，それ自体の主張は欠く。

こうした1998年長野大会以来の曖昧模糊とした脱20世紀型大会[50]は，近代オリンピック競技大会という固有名詞（オリンピックシンボル）は保持するものの，近代オリンピック競技大会と他の国際的スポーツ競技大会との差異を不明瞭とする，と本稿は指摘する。

以上を踏まえ，次に，1964年東京大会と1972年札幌大会の大会エンブレムとは異なり，Snow flowerが幾何学形体ではなく複数の色彩使い，colorfulをオリンピックシンボルとの共通項とすることについて見ていこう。

ｂ．Colorful

近代オリンピック競技大会とは(1)オリンピズムに対する理解と賛同において結びついた(2)様々な人々，異なる国と地域が集う場であり機会である。オリンピックシンボルは(1)を組み合わさった輪で，(2)を異なる色彩で示す。

1964年東京大会の大会エンブレムではオリンピックシンボルは金色一色で表された。1972年札幌大会の大会エンブレムではIOCが新たに加えた規定によりオリンピックシンボルは本来の色彩で表されるが，大会エンブレムとオリンピックシンボルの共通項は色彩ではなく幾何学形体である。加えるならば，両大会エンブレムは幾何学形体の他，金と銀というメタリック

カラーの使用を共通項とする。

一方，Snow flower は1964年東京大会と1972年札幌大会の大会エンブレムの特徴の１つであり，１位と２位といった優勝劣敗を表すメダルのメタリックカラーを用いず，多色使いである。Snow flower の鮮やかな複数の独立した色彩はオリンピックシンボルの，５大陸を象徴する青，黄，黒，緑，赤を用い世界の多種多様性の尊重を表した色彩使いと共通するものだ。

Snow flower の２点の特徴，①開催地域と開催都市の匿名化，②オリンピックシンボルとの colorful という要素の共有は，1998年長野大会が1964年東京大会から1972年札幌大会へと継承された国体と結びついた globalism を受け継がないことを示す。

しかしながら，既に Snow flower に見たように，20世紀型大会を補完する要素に焦点をあてた1998年長野大会は，多種多様な参加メンバーをオリンピズムに対する理解と賛同において結びつける新たな方法を提示するものではなかった。

1998年長野大会は脱20世紀型大会を提示するという目的は達成した。しかし，開催地域を文化的に特定し開催地域の人々に特別に訴える要素を持たない点においても1998年長野大会は，様々な人々，異なる国と地域が集う場であり機会である国際的なスポーツ競技大会という性格以上のものを示し得ず，近代オリンピック競技大会としては不完全なものに留まった，と本稿は指摘する。

## おわりに

1964年東京大会は第二次世界大戦の敗戦国であり戦後復興（国際社会への復帰と高度経済成長）を課題とした日本，その首都である東京都で開催された。

オリンピズムの要点の１つが平和であるが，戦後という時代において平和に対する解釈は錯綜する。その結果，1964年東京大会でのオリンピズムと国体と結びついた globalism との混同は近代オリンピック競技大会の特殊例に収まらず，1964年東京大会は20世紀型大会のロールモデルとなる。

1964年東京大会の最大の特徴は20世紀型大会を提示し，以降の近代オリンピック競技大会の隆盛に貢献したことであった。夏季の1964年東京大会と一対に捉えられた冬季の1972年札幌大会は20世紀型大会を継承し，その定着に貢献するものとなった。

近代オリンピック競技大会を象徴するオリンピックシンボルは⑴組み合わさった輪でオリンピズムに対する理解と賛同による結びつきを，⑵異なる独立した色彩で様々な人々，異なる国と地域が集う場であり機会であることを示す。

しかし20世紀型大会では，1964年東京大会と1972年札幌大会を象徴する両大会エンブレム①日本の国旗を想起させる赤い円を主とすることに国体優先が，②赤い円がオリンピックシン

ボルと幾何学形体を共通項に部分の一致において結びつくことに，世界を地域等の独立した単位からではなく連関したシステムとして捉える globalism が示される，に見るようにオリンピズムは度外視される。20世紀型大会は近代オリンピック競技大会への参加を簡易化し規模を拡大させる一方，世界の文化，政治，経済等々の優劣比較を持ち込み[51] オリンピズムは形骸化する。

1998年長野大会の大会エンブレム Snow flower の特徴は，ⓐ開催地域と開催都市を匿名化し，ⓑオリンピックシンボルの幾何学形体ではなく colorful を共通項とし，ⓒ1964年東京大会と1972年札幌大会の両大会エンブレムの家紋に因る方法に相当する，開催地域を文化的に特定し開催地域の人々に特別に訴える要素を欠くことであった。

1998年長野大会の20世紀型大会を補完する特徴及び Snow flower に示されるように，1998年長野大会は国体と結びついた globalism は継承しないものの，それに換わる参加メンバーを結びつける新たな方法は提示しなかった。そのため1998年長野大会は脱20世紀型大会を提示したが，国際的なスポーツ競技大会以上の性格を明示するまでには至らなかった。

以上に見た20世紀型大会以降の問題を是正し，オリンピズムの普及という本来の目的に立ち返るために IOC は2002年にレガシーを明文化する。

本稿での検証，考察から，先ず東京2016が1964年東京大会から継承すべきレガシーが，20世紀型大会の特徴となった，国体と結びついた globalism ではないことが，次に東京2016が継承すべき1964年東京大会のレガシーは以下の３点であることが明らかとなった。

東京2016が継承すべき1964年東京大会のレガシーとは，第１はオリンピズムの要点の１つである平和を基軸とする，参加メンバーを結びつける新たな方法を提示すること，第２は最も重要な基盤，開催地域の人々の支持を得るために，開催地域を文化的に特定する方法により開催地域の人々に特別に訴える効果を用いること，第３は第１と第２を踏まえ，以降の近代オリンピック競技大会のロールモデルとしての役割を果たすことである。

東京2016は新たな21世紀型大会を提示することを『申請ファイル *Response to the Questionnaire*』に明記し[52]，東京2016の大会エンブレム（2008年６月12日付）も発表された。1964年東京大会から継承すべきレガシーについては更に東京2016の大会エンブレムを取り上げ，別稿にて論を進めることとする。

本稿では1964年東京大会から東京2016が継承すべきレガシーに焦点を絞ったことから，1972年札幌大会と1998長野大会については1964年東京大会との関連性以外は割愛し，紙幅の関係から1964年以降に他の地域で開催された大会と大会エンブレムについては取り上げなかった。これらの検証，考察は今後に残された課題である。

**謝　辞**

1972年札幌大会エンブレムをはじめ，1964年東京大会エンブレム及び1998年長野大会エンブレムに関する調査では，永井一正氏から多くの貴重なご助言ご教示をいただきました。心より御礼申し上げます。

1998年長野大会についての調査では小柳仁彦氏（当時長野市教育委員会体育課　オリンピックムーブメント推進室）をはじめ，ご協力頂いた皆様に感謝致します。

**註**　本文中の敬称は省略した。

別途に表記していない場合，ＨＰ上の情報を最終確認した期日は2008年５月３日である。

1　IOC（JOC 編，JOC HP 確認期日：2008年11月２日）『オリンピック憲章　*OLYMPIC CHARTER*（2007年７月７日より有効），倫理 *ETHICS 2007*』JOC　p. 13
JOC（2006年11月20日）『*OLYMPIAN*』秋号　JOC　p. 37
IOC, International Symposium on Legacy of the Olympic Games, 1984-2000 14th-16th November 2002 (2003) *Conclusions and Recommendations, The Legacy of the Olympic Games: 1984-2000.* IOC
http://multimedia.olympic.org/pdf/en_report_635.pdf　他。

2　IOC（JOC 編，JOC HP 確認期日：2008年11月２日）『オリンピック憲章 *OLYMPIC CHARTER*（2007年７月７日より有効），倫理 *ETHICS 2007*』JOC　p. 10

3　IOC HP　http://www.olympic.org/uk/news/olympic_news/full_story_uk.asp?id=2591　他。

4　近代オリンピック競技大会を複数回，同一都市が開催することは珍しいことではない：Athens（1896，1906［非公式］，2004），Paris（1900，1924），London（1908，1948），Los Angels（1932，1984）。東京都以外の2016年大会の候補都市には近代オリンピック競技大会開催の経験はない。

5　東京2016（2008年１月10日）『申請ファイル *Response to the Questionnaire*』東京2016　pp. 3–6
JOC（2008年３月24日）『*OLYMPIAN*』Vol. 4　JOC　pp. 6–7，41–45
JOC（2006年11月20日）『*OLYMPIAN*』秋号　JOC　pp. 12–13，18–19

6　東京2016（2008年１月10日）『申請ファイル *Response to the Questionnaire*』東京2016：2008年11月14日に開催された東京2016理事会において同『申請ファイル』での会場計画が一部変更される。
東京2016　ＨＰ　http://www.tokyo2016.or.jp/jp/press/2008/11/post_46.html
Tokyo2016PressReleasee081114_01_jp.pdf
東京2016（2008年11月18日）http://www.tokyo2016.or.jp/jp/plan/venue/

7　JOC（2006年11月20日）『*OLYMPIAN*』秋号　JOC　p. 37　他。

8　経済効果の他，社会問題（環境，人権，教育等）の解決に繋がること。ここには東京都が21世紀の首都のロールモデルとなることも含まれる。
東京2016　http://www.tokyo2016.or.jp/jp/messagebook/#

9　IOC（JOC 編，JOC HP 確認期日：2008年11月２日）『オリンピック憲章 *OLYMPIC CHARTER*（2007年７月７日より有効），倫理 *ETHICS 2007*』JOC　p. 61–62

10　各大会 IOC 公式報告書　http://www.la84foundation.org/6oic/OfficialReports/　他。

11　オリンピズムを地球規模で普及させるため，近代オリンピック競技大会の開催地は世界各国の各都市を巡回するものとされ，連続して同一地域が選出されることはない。

12　註４を参照のこと。

13　20世紀型大会の国体と結びついた globalism を肯定的に取り上げたもの，または国体と結びついた globalism の事例分析の対象として20世紀型大会を取り上げたもの。
ブランデージ，アベリー　宮川毅訳（1972）『近代オリンピックの遺産』ベースボールマガジン

ブーアスティン，D.J. 星野郁美・後藤和彦訳（1972）『幻影の時代 ── マスコミが製造する事実 ──』東京創元社
Debord, Guy　木下誠訳（1993）『スペクタクルの社会 ── 情報資本主義批判 ──』平凡社　他。
14　論者による（2008）「東京2016ロゴについて」『デザイン理論』第53号　意匠学会　他。
15　レガシーは2012年 London 大会から施行される。2012年 London 大会においては，例えば globalism の特徴である拡大路線から一転する大会規模の縮小が決定されている他，若者層への参加の呼びかけ，選手主体の競技大会等が提示されている。JOC（2006年11月20日）『*OLYMPIAN*』秋号 JOC　p. 37
London 2012 HP　http://www.london2012.com/news/publications/candidate-file.php
16　論者による2000年度修士申請論文（大阪大学大学院，文学研究科，文化表現論専攻）『亀倉雄策の東京オリンピックポスター ── そのコミュニケーション観を中心に ──』他。
17　近代オリンピック競技大会開催反対デモには反 globalism が掲げられる。
18　註５を参照のこと。
19　札幌オリンピック冬季大会組織委員会（1970）『札幌オリンピック冬季大会　1972　公式総合版 *Official Commemorative Issue*』実業之友社　pp. 19–20
20　JOC HP　http://www.joc.or.jp/stories/sportsandart/200803.html
21　同上。
22　IOC HP　http://www.olympic.org/uk/games/past/collectior_uk.asp?type=5&id=19&OLGT=1
同　http://www.olympic.org/uk/games/past/collectior_uk.asp?type=4&id=20&OLGT=1　他。
23　札幌オリンピック冬季大会組織委員会（1970）『札幌オリンピック冬季大会　1972　公式総合版 *Official Commemorative Issue*』実業之友社　pp. 194–195
24　同上 p. 194
25　同上 p. 194
26　同上 p. 195　他。
27　JOC HP　http://www.joc.or.jp/stories/sportsandart/200803.html　他。
28　同上。
29　文部省（1969）『雪と氷のスポーツ ── 札幌オリンピックをめざして ──』文部省　pp. 85–86　他。
30　札幌オリンピック冬季大会組織委員会（1970）『札幌オリンピック冬季大会　1972　公式総合版 *Official Commemorative Issue*』実業之友社　p. 194
31　同上 pp. 194–195　他。
32　JOC HP　http://www.joc.or.jp/stories/sportsandart/200803.html　他。
33　論者による2000年度修士申請論文（大阪大学大学院，文学研究科，文化表現論専攻）『亀倉雄策の東京オリンピックポスター ── そのコミュニケーション観を中心に ──』他。
34　瀬木慎一，田中一光，佐野寛監修（2000）『日宣美の時代　日本のグラフィックデザイン1951－70』株式会社トランスアート　p. 104
第145回国会内閣委員会第12号　1999年７月16日午前９時11分開議－午後12時５分散会（2009年３月13日）http://kokkai.ndl.go.jp/SENTAKU/syugiin/145/0002/14507160002012a.html
35　IOC HP　http://www.olympic.org/uk/games/past/index_uk.asp?OLGT=1&OLGY=1896　他。
36　JOC HP　http://www.joc.or.jp/stories/sportsandart/200803.html
札幌オリンピック冬季大会組織委員会（1970）『札幌オリンピック冬季大会　1972　公式総合版 *Official Commemorative Issue*』実業之友社　p. 195
宮崎美友編（1999）『索引で自由に探せる家紋大図鑑』新人物往来社　p. 120，139　他。

37　JOC HP　http://www.joc.or.jp/stories/sportsandart/200803.html

38　JOC 監修（JOC HP 確認期日：2008年11月２日）『オリンピック憲章 *OLYMPIC CHARTER*（2007年７月７日より有効），倫理 *ETHICS 2007*』JOC　p. 19

39　吉沢恒敏編（1987）『家紋台帳』金園社　他。

40　論者による2000年度修士申請論文（大阪大学大学院，文学研究科，文化表現論専攻）『亀倉雄策の東京オリンピックポスター ── そのコミュニケーション観を中心に ──』他。

41　JOC 監修（1994）『近代オリンピック100年の歩み』ベースボールマガジン社　p. 274　他。

42　JOC 監修（1994）『近代オリンピック100年の歩み』ベースボールマガジン社　pp. 274-275

43　小柳仁彦氏（2002年11月５日付。長野市教育委員会体育課　オリンピックムーブメント推進室）からご教示いただく。
IOC オフィシャル・スーベニールブック（1998）『長野オリンピック1998　第18回オリンピック冬季競技大会1998 ／長野』ベースボールマガジン社
NAOC（1997）『*'98 NAGANO ── The XVIII Olympic Winter Games, Nagano 1998*』NAOC
財団法人長野オリンピック冬季競技大会組織委員会（1997）『長野オリンピック　公式ガイドブック　２月７日～２月22日1998（改訂版）』信濃毎日新聞社　pp. 16-17
JOC 監（1994）『近代オリンピック100年の歩み』ベースボールマガジン社　pp. 274-276　他。

44　Landor Associates HP　http://www.landor.com/index.cfm?bhcp=1　他。

45　主にポスターに関して青葉益輝氏からご教示いただく（2002年10月23日付）。デザイン関係者間において情報の共有が十全ではなかったことは，鈴木八朗氏からのご回答を含め（2002年10月23日付）当方が推察したものである。

46　IDEA CRENT HP　http://www.ideacrent.co.jp/designer/designer.html　他。

47　財団法人長野オリンピック冬季競技大会組織委員会（1997）『長野オリンピック　公式ガイドブック　２月７日～２月22日　1998（改訂版）』信濃毎日新聞社　p. 20
IOC HP　http://www.olympic.org/uk/games/past/index_uk.asp?OLGT=2&OLGY=1998

48　財団法人長野オリンピック冬季競技大会組織委員会（1997）『長野オリンピック　公式ガイドブック　２月７日～２月22日　1998（改訂版）』信濃毎日新聞社　p. 20
IOC HP　http://www.olympic.org/uk/games/past/index_uk.asp?OLGT=2&OLGY=1998　他。

49　論者による2007年度博士申請論文（京都工芸繊維大学大学院，工芸科学研究科，機能科学専攻）『視覚的コミュニケーションについて ── Paul Rand，田中一光，Oliviero Toscani による作品を事例に ──』

50　21世紀型大会は未だ提示されていない。

51　例えば1972年 Munich 大会でのテロ事件，1980年 Moscow 大会と1984年 Los Angels 大会での参加ボイコット。

52　東京2016（2008年１月10日）『申請ファイル *Response to the Questionnaire*』東京2016　pp. 3-6
JOC（2008年３月24日）『*OLYMPIAN*』Vol. 4　JOC　pp. 6-7，41-45
JOC（2006年11月20日）『*OLYMPIAN*』秋号　JOC　pp. 12-13，18-19